

1. 授業の概要(ねらい)

心理面接とはなんだろうか。一説によれば、心理面接と呼ばれるものは少なくとも400種類以上はあるという。このなかには、カウンセリングやコンサルテーション(相談)などといった用語で表現されるような極めて表面的な方法から、本格的な精神分析まで様々な方法が含まれる。本講義では、心理療法のなかで最も深い方法の一つである精神分析的な心理療法の学習をベースにしつつ、どのような心理療法にも通底すると思われる臨床心理面接の基本を学ぶことを目標とする。松木(2005)は、“…私たちが誰かのところに援助したいと真剣に思うのなら、私たちの理解と技量はこれくらいいいんだとの安易さや簡便さは望まれるべきではありません。またころを私利や欲望から安易にあつかうのは罪悪です。大いなる努力や没頭、禁欲、根気、ときとして犠牲が必要であるとしても、ころのもっとも深いところに会い、働きかけられるものを真摯に学ぼうとしてよいではありませんか”と述べている。実証することは困難なことが多いかもしれないが、「人と人との関わりで何かが変わるはず」という信念を持って、先人たちの経験からできるかぎりのことを学びたいと思う。

そもそも人の話を聴くことは、極めて日常的な当たり前の営為である。この日常的な営為と、「ころの臨床家」が専門家として行っている傾聴とはどこが違うのだろうか。この違いはどのように表現できるのだろうか。いわゆる「共感」や「受容」と、「共感しているふり」「受容しているつもり」とはどのように異なるのだろうか。こうした「基礎技術」はどのように身につけられるのだろうか。ここでは、こうした表現にくい専門的な営みとしての心理面接の性質や中身や位置づけについて講義する。これは、これから臨床家を目指す人には今後進むべき方向の道しるべとなるにちがいないし、そうでない人たちにも、人間関係のありようについてさまざまな考える契機になるだろう。

参考文献の著者の言葉をいくつか拾ってみたい。

「…問題は、“傾聴”といいながら、私たちが患者の発言をただまる飲みしてただけだったことです。それらの発言にある思いを噛みしめて味わうことができいていませんでした。…患者のころとつながりを持って共感し受容するというプロセスもわからず、ただ私たちが共感と受容と考えるものを一方的に体現しようとしていたに過ぎませんでした。」

「質問リストを読んで尋ねること、私たちが傾聴しつつころに触れながら問いを発することはまったく異なっています。」

「聞いている側がみずからのころの平穏を守るために行う知的な聞き方や表面的な親しみでは、ころに出会うことは達成できません。それはころに出会っている“かのような”聴き方、接し方にすぎないのです。」

「ころの臨床での聞くことは、語られる内容を正確に理解することではありません。…クライアント／患者の思いを聴くことこそが重要…です。」

「私たちの頭にあらかじめ収められている概念や思考…を、そのクライアント／患者にあてはめる関わり方では、ころに出会うこと、ころに触れることにはならない…」

「(心理面接の技術を磨き上げていく際、)一日に0.005ミリの違いが生じているとしたなら、それはそのときには目に見えないし、何の違いも生じていないようでしょうが、それが1000日積み重なったら、5ミリになります。…10年間なら、18.25ミリになるでしょう。…こうした変化は「超越」ではなく、目標を持った努力が達成することなのです。」「修練は限りなく続く…」「ゆえにやりがいのあるもの。」

表面的な適応だけを支援しようとするのではない、あるいはそうした方法論に限界を感じて、相手のころの深い部分との交流をベースにしたある種の職人技でもある心理面接について考えてみたい人の受講を勧めたい。

可能であれば、小グループに分かれてのディスカッションを組み込んでいく予定である。

2. 授業の到達目標

この講義は臨床実践領域の知識を修得し、その法則や理論を説明できることを目標としている。具体的には心理面接、心理療法の基本である傾聴について、その本質、深さ、実際の概要を理解することを目標とする。この講義を受けることで、心理療法家への道を歩もうと考える学生が一人でも増えることを期待したい。

3. 成績評価の方法および基準

講義ノート提出20%、課題提出(LMS上で行う予定)20%、試験(14回目にLMS上で行う予定)60%の予定である。出席は義務付けないが、期間中数回、その日の講義内容を30分間ほどかけて自らとったノートに沿ってまとめる、提出を求める。

4. 教科書・参考文献

参考文献

グレン・O・ギャバード(著)、奥寺崇(監訳)、白波瀬丈一郎(監訳)、池田暁史(監訳)
精神力動的な精神医学―その臨床実践 第5版(DSM-5準拠) 岩崎学術出版社
松木邦裕 耳の傾け方―ころの臨床家を目指す人たちに 岩崎学術出版社

5. 準備学習の内容

事前に参考文献の該当部分を読み、A4で1枚程度のレポートとしてまとめてもらうことが望ましい。参考文献の1は指定図書である、履修生には、順番にその一部をまとめてレポートとして提出し、プレゼンテーションしていただくことを検討している。その他、都度文献を提示し、準備学習及び講義で使用する。

6. その他履修上の注意事項

真剣に学ぼうとしている他の学生の邪魔(私語、携帯電話など)をしないこと。積極的な質問、意見表明は歓迎する。

適宜池田のホームページの連絡事項を確認すること。

<https://appsv.main.teikyo-u.ac.jp/~m-kieda/index.htm>

7. 授業内容

- 【第1回】 以下の予定であるが、あくまでも目安である。
乳幼児観察を参考にしながら、支持的な聴き方から、精神分析的リスニングに至る、様々な深さの聴き方の存在と概要について学ぶ。
- 【第2回】 耳を傾けること、ころを理解することとはどのようなことを学ぶ
- 【第3回】 聴くことの学びと訓練について学ぶ
- 【第4回】 深い聴き方、いわゆる共感と受容、聴くことの難しさについて学ぶ
- 【第5回】 ころに出会う、触れることの難しさ、聴くことによってころに出会うことについて学ぶ

- 【第6回】 精神療法(心理療法)とは何かについて学ぶ
- 【第7回】 治療者の基本的態度、治療構造の設定、受容することについて学ぶ
- 【第8回】 力動精神医学の基本原則について学ぶ:主観的体験の比類ない価値、無意識、心的決定論
- 【第9回】 力動精神医学の基本原則について学ぶ:転移、逆転移、抵抗、神経生物学との関係、現代精神医学との関係
- 【第10回】 精神力動的アセスメントについて学ぶ:臨床面接における精神力動的面接と医学的面接の違い、臨床面接における転移と逆転移
- 【第11回】 精神力動的アセスメントについて学ぶ:臨床面接における病歴聴取、精神状態の観察
- 【第12回】 精神力動的アセスメントについて学ぶ:身体的検査と神経学検査、記述精神病理学的診断と精神力動的診断
- 【第13回】 精神力動的アセスメントについて学ぶ:精神力動的診断(自我の特徴、対象関係、自己、愛着パターンとメンタライゼーション)精神力動的定式化
- 【第14回】 オンライン授業:LMS上で試験とまとめ
- 【第15回】 試験解説